

高浜虚子

京都で会つた漱石氏

京都で会った漱石氏

私は別項「漱石氏と私」中に掲げた漱石氏の手紙を点検している間に明治四十年の春漱石氏と京都で出会った時の事を昨日の如く目前に髣髴ほうふつした。これは「漱石氏と私」中に記載してもいい事であるけれども、手紙の分量の多いために、一々その聯想を書く事は煩わづらわしいので、そこにはこれを省き、別に一章としてその当時の回想を書き止めて見ようと思ひ立ったのである。

それは春雨の降っている日であった。七条の停車場ステーションか

ら乗った俵は三條の万屋の前に梶棒を下ろした。幌ほろの
中で聞いている京都の春雨の音は静かであったが、それ
でも賑やかな通に出ると俵の轍わだちの音が騒々しく行き交まじ
ってやわらかみのある京都言葉も、慌あわただしげに強く響い
て来るのであった。今俵の幌の中からぬけ出て茶屋の前
に立った私は春めき立った京都の宿の緊張した光景を直す
ぐ目の前に見た。二、三人の客は女中たちに送られて門
前に待っている俵に乗って何処どこかに出掛けて行くらしい
様子であった。私の俵に並んで梶棒を下ろした俵からは、
別の客が下り立って、番頭や女将から馴れ馴れしげに迎

えられていた。私はその混雑の中を鞆をさげた女中の後に跟ついて二階の一室に通された。客が多いにかかわらず割合広い座敷が私のために用意されていたので私の心は延び延びとした。

私は座敷に落付くや否や其処そこの硯すずりを取り寄せて一本の手紙を書いた。それは少し以前から此の地に來ているはずの漱石氏に宛あてたものであった。下鴨の狩野亨吉氏かのうこうきちの家に逗留しているという事であったので、未だ滞在しているかももう行き違つて歸京したか、若しまだ滞在して居るのならばこれから直ぐ遊びに行つても好よい、また宿

の方へ来てくれても好い、というような意味の事を書いて遣^やった。早速漱石氏からは、まだ滞在して居る、とにかく直ぐ遊びに来ないか、という返事があつた。そこで私は俥に乗って下鴨の方に出掛けた。下鴨あたりの光景は、私が吉田の下宿に居た時分に比べると非常に変化していた。以前の京都では見られなかつた東京風の家が建つていた。それには大学や高等学校の先生たちが大方住^{すま}っている模様であつた。軒々に散見する名札の中には大分知つた名前があつた。その二十四番地に狩野という名札を見出して私は案内を乞うた。狩野氏の事に就いては

漱石氏から時々話を聞いていた。現に私は漱石氏の最も信頼する友人として明治三十年頃紹介状をもらった事すらあった。もつとも私はその頃差さしつかえ支があつてその紹介状はそのままにして狩野氏に逢う機会を見出さなかつた。その紹介状は現に私の手元に残っていて、そうして初めて狩野氏に逢つたのは実に漱石氏の瞑目めいもくするその当夜であつた。閑話休題として、その狩野氏は妻君を持たないで独身生活をつづけているという事を私は予てかね漱石氏から聞いていたが、春雨の降って居る門内の白い土を踏んでその玄関に立った時私はあたかも寺の庫裡くりにも這

入ったような清い冷たい感じを受けた。玄関には支那の書物らしいものがやや乱雑に積重ねてあつて、古びた毛氈もうせんのような赤い布が何物かの上に置いてあつた。その毛氈の赤い色が強く私の目を射た。それは確かに赤い色には相違なかつたが、少しも脂粉の気を誘うようなものではなかつた。表に降つて居る春雨も、一度この玄関内の光景に接すると忽ちその艶を失つてしまふように思われた。私の案内の声に応じて現われたのは一人の破袴を穿はいた丈高い書生さんであつた。来意を通ずると直ちに私を漱石氏の室に通した。

漱石氏は一人つくねんと六畳の座敷の机の前に坐っていた。第三高等学校の校長である主人公も、折ふし此の家逗留しつつある菅虎雄氏すがとらおも皆外出中であつて、自分一人家に残っているのであると漱石氏は話した。この漱石氏の京都滞在は、朝日新聞入社の記事に關聯してであつて、氏の腹中にはその後『朝日新聞』紙上に連載した「虞美人草」の稿案が組み立てられつつあつたのであつた。「何処どこかへ遊びに行きましたか。」と私は尋ねた。「狩野と菅と三人で叡山へ登つた事と菅の案内で相国寺や妙心寺や天竜寺などを觀に行った位のものです。」と

氏は答えた。

「お寺ばかりですね。」

そういつて私が笑うと氏もフフフンと笑って、

「菅の案内だもの」と答えた。

ともかく何処かで午飯を食おうという事になって、私は山端の平八茶屋に氏を誘い出した。春雨の平八茶屋は我らの外に一人の客もなくって静かさを通り越して寧ろ淋しかった。四月発行の『ホトトギス』の話になった時、氏は私の『風流懺法』ふうりゆうせんぽうを推賞して、こういう短篇を沢山書いたらよかろうと言った。私は一月前齋藤知白君と

叡山に遊び、叡山を下りてから、一足さき京都に来ていた知白君と一緒に一力に舞子の舞を観て『風流懺法』を書いたのであったが、今度の旅行は奈良の法隆寺に遊ぶ積りで出掛けて来たのである。漱石氏に逢った上は今夕にも奈良の方へ出掛ける積りであったのであるが、漱石氏が折角^{せっかく}京都に滞在していて寺ばかり歩いていると聞いた時、私は今夜せめて都踊だけにでも氏を引っぱって行くかと思ひ立った。

「京都へ来てお寺ばかり歩いても仕方がないでしょう。今夜都踊でも観に行きましようか。」と私は言った。

「行って観ましよう。」と漱石氏は無造作に答えた。その時の様子が、今日一日は私のする通りになるといったような、極めてすなおな、何事も打まかせたような態度であつた。

「それではともかくもこれから私の宿まで行きませんか。」と言つて私は氏を私の宿に引っぱつて歸つた。

宿屋に這^は入^いつた後漱石氏は不思議な様子を私に見せた。狩野氏の家を出てから山端の平八茶屋で午飯を食うて此の宿の門前に来るまでは如何^いにも柔順^すな子供^ならしい態度の漱石氏であつたが、一度宿屋の門をくぐつて女中

たちが我らを出迎えてからは、たちまち奇矯ききょうな漱石氏に
変ってしまった。万屋は固もとより第一流の宿屋ではない。
また三流四流に下る宿屋でもない。私たちは何の考慮を
煩わす事もなしに、ただ自分の家の門をくぐるのと同じ
ような気軽い心持で出入する程度の宿屋であつたのだ
が、漱石氏の神経はこの宿の鬪しきいをまたぐと同時に異常
に昂奮した。まず女中が挨拶をするのに対して冷眼に
一瞥いちべつをくれたままで、黙って返事をしなかった。そうし
てしばらくしてから、

「姉さんの眼は妙な恰好の眼だね。」と言って、如何いかに

もその女を憎悪するような顔付をしていた。平凡なおとなしいその京都の女は、温おんしよく色を包んで伏目になって引き下がった。やがて湯に這入らぬかと言って今度は別の女中が顔を出した。これはお重じゆうという女中頭をしている気の勝った女であつた。

「一緒に這入りませんか。」と私が勧めたら、氏は、「這入りましたよ。」と言って逆らわなかつた。が、その時投げ出していた足をお重の鼻先に突き出して黙ってお重を瞰ねめつけていた。お重は顔を赤くして、口を堅く引き緊しめて、じつとそれを見ていたが漸く怒をおさ圧え得た

らしい様子で、

「足袋をお脱ぬがせ申すのどすか。」と言つて両手を掛けてはぜを外しかけた。その足袋の雲齋底には黒く脂が滲み出していて、紺には白く埃がかかつていた。片方の足袋を脱がし終ると更らに此方こちらの足を突き出した。それもお重は隠忍して脱がせた。私は何のために漱石氏がそんな事をするのかと、ただ可笑おかしく思いながら、その光景ありさまを眺めて居た。が、もう少し宿が威張った宿であるとか、女中が素的な美人であるとかしたならば、この舞台も映えるかも知れないけれども、そんなに漱石氏が芝居をす

るほどの舞台でもあるまいというような少し厭な心持もせぬではなかった。私は氏を促し立てて湯殿に這入った。

湯殿は大きな鏡があつたり、蠟石のテーブルがあつたり、新しい白木の湯槽ゆぶねに栓をねじると美しい京都の水がほとぼし迸り出たり、四壁にはめたガラスを透して穏かな春の日影が流れ込んで来たりするので、漱石氏の心はよほど平らかになつた模様であつた。

「これは贅沢な風呂だ。」などと言いながら自分で栓をねじって迸り出る水を快さそうに眺めながら手拭を持つた手で風呂の中を掻き廻しなどしていた。白い手拭が清

澄な水の中で布晒ぬのさらしのように棚引いていた。二人は春の
日いが何時つ暮れるとも知らぬような心持で、ゆつくりと此
の湯槽の中に浸つかって、道後の温泉の回想談やその他取り
とめもない雑談をして大分長い時間を此の湯殿で費し
た。

湯から出た後の漱石氏は前ほどに昂奮していなかつ
た。お重に鋏はさみを借りて縁に投げ出した足の爪を自ら剪き
ったりした。お重と二人廊下に立って春雨に曇った東山
を眺めながら、あれが清水の塔だ、あれが八坂の塔だな
ど、話し合っていたりした。晩飯をすませしてから灯火ともしびの

巷の花見小路を通って二人は都踊に這入った。

都踊の光景は何時来て見ても同じものであった。待合室に待って居る間に、客に連れられた一人の舞子が私に辞儀をした。

「君は舞子を知っているのですか。」と漱石氏は不思議そうに私に訊きいた。

「あれは『風流懺法』の中に書いた松まつ勇ゆうという舞子です」と私は答えた。松勇らの一群は流るる水のように灯の下を過ぎて何処どこかに消えてしまった。今演ぜられつつある踊が一段落となって今の見物人が追い出されたため

に繰込むべく待合わしている此の待合室の客は刻々に
人数にんずを増して来た。ガラス張りの戸棚うちの中には花魁おいらんの着
る裌しかけ襦が電燈の光を浴びて陳列してあつた。そのガラス
の廻りにへばりついている人には若い京都風の男もあれ
ば妻君を携帯している東京風の男もあつた。それらの群
集の中に手持不沙汰に突立っている一人の西洋人を見出
したときに漱石氏は「あれはウッドでないか。」と口の
中で呟くように言った。この待合室に這入った後の漱石
氏はまた万屋の鬩をまたいだ後の漱石氏と同じようにそ
の顔面の筋肉は異常に緊きしまっているように思われた

が、この時私はつかつかとその西洋人の方に進んで行く
漱石氏の姿を認めた。

「アア、ユウ、ウッド？」という極めて鋭い漱石氏の発
音が私の耳を擘つんぎくように聞こえた。それと同時に私は
あっ気を取られた顔をして無言のまま漱石氏を見下して
いるその西洋人の顔を見出した。私は漱石氏がそのウツ
ドなる西洋人に対して何か深怨を抱いていて、今此ここ処で
出会ったを幸に、何事かを面責しようとしているのかと
想像しつつこれを凝視していた。しばらく漱石氏の顔を
見下していた西洋人は、やがてついと顔を外らして、向

うの群集の中に這入ってしまった。

「どうしたのです。」と私は漱石氏を迎えて訊いた。

「勝手が判らなくってまごまごしているのは可哀想と思
うたから……。」と言いかけて氏は堅く口を緘とじて鋭い
目で前方を瞰にらんでいた。私は氏がその西洋人を旧知のウ
ツドなる人を見違えたのだったろうと考えてその以上を
追求して尋ねなかつた。

やがて時間が来て待合室を出た一同は、ぞろぞろと会
場に流れ込んで目の前に何十人という美人が現われ出た
のを眺め入るのであった。漱石氏も別に厭な心持もしな

かったと見えて、かつて本郷座や新富座の芝居を見た時のような皮肉な批評も下さずに黙ってそれを見ていた。踊がすんで別室で茶を喫む時も、一人の太夫が衆人環視の中で、目まじろかずと言ったような態度で、玉虫色の濃い紅をつけた唇を灯に輝やかせながら、茶の手前をしているのを氏は面白そうに眺めていた。その手前がすむと忽ち数十人のお酌が人形箱から繰り出したように現たちまわれて来て、列を作って待受けている我らの前に一ぷくずつの薄茶茶碗を運んで来るその光景をまた氏は面白そうに眺めていた。そうして京都言葉で喋ちようちよう々と喋り立て

る老若男女に伍して一服の抹茶をすするのであった。

都踊を出て漱石氏はその儘下鴨の狩野氏の家に戻る心持もしなかつたようであつた。私は三条の私の宿に同道しようとも思つたのであつたが、花見小路の灯の下のぬかるみの中に立って、漱石氏に、

「『風流懺法』の一力に行つて見ましようか。まだ一、二時間は遊ぶ時間があるだろう。」と言つた。

「ええ行つて見ましよう。」と漱石氏は答えた。

都踊時分の一力は何時にも客が満員であると思つて聞いた。とても座敷が明いていないだらうと思つながら、私

は前月知り合いになった仲居の誰れ彼れに交渉して見たら、幸に一つの座敷が明いているとの事であつたので、その座敷に上つた。『風流懺法』に書いた名前の舞子は半なかば以上顔を見せた。けれどもそれは舞子たちのみであつて、姉さんたちの芸子は新らしい顔ばかりであつた。その中にお常つねさんという顔も美しくなければ三味線も達者に弾けない、服装なりも他に比べて大分見劣りのする芸子が一人混っていた。それが何かにつけて仲居からも他の朋輩からも軽蔑される様子のある事が痛ましく眺められた。私は此の芸子の名前がお常というのであつた事を何

故今でも記憶しているかと言うと、それは漱石氏の次の言葉を今も忘れずに牢記しているからである。

「あのお常さんという女は芸者を止めてよろしく淑女となるべしだ。」

私はこの言葉を聞いた時に覚えす噴き出して笑った。

漱石氏もまた笑った。

燭台の蠟燭ろうそくの光は何時いつもの如く大きく揺れていた。仲居の大きな赤前垂の色は席上に現われたり消えたりした。三味線の糸の切れる音や、舞扇の音を立てて開く音なども春の夜の過ぎ行く時を刻んで、時々鋭く響き渡つ

た。そんな時間が経過している間にお常さんの姿も席上から消えて失くなってしまう、多くの芸子舞子の姿も消えて失くなってしまった。漱石氏はその手に携えていた書家が持つようなスケッチ帳を拡げて舞子に何かを書かしていた。それは先刻お常さんが淋しい声で歌った唄の文句であるらしかった。舞子の頭に翳した櫛の名前が花櫛という事や、畳の上を曳きずっている長い帯をだらりという事や、そういう名称なども舞子の片仮名交りの文字でその帳の上に書きとめさせていた。

「それでいい、なかなか千賀菊さんは字が旨いね。」な

どと漱石氏は物優しい低い声で話していた。千賀菊というのは『風流懺法』で私が三千歳みちとせと呼んだ舞子であった。

多くの舞子が去った後に残っていたのは、此の十三歳の千賀菊と同じく十三歳の玉喜たまぎく久との二人であった。二人とも都踊に出るために頭はふだんの時よりももっと派手な大きな鬘ゆに結っていた。花櫛もいつものよりももっと大きく派手な櫛であった。蠟燭の焰の揺らぐ下に、その大きな鬘を俯うつむ向けて、三味線箱の上に乗せたスケッチ帳の上に両腕を左右に突き出すようにして書いている千賀菊の姿は艶に見えた。

私たちはその夜は此の十三歳の二人の少女と共に此の
一方の一間に夜を更かしてそのまま眠つて了しまつた。

暁の光が此の十三歳の二人の少女の白粉おしろいを塗つた寝顔
の上に覺束なく落ち始めた頃私たちは宿に歸る事にし
た。二人の少女は眼を覺まして我らを広い黒光りのして
いる玄関に送り出して來た。其処そこには我ら四人の外一人
の人影もなかつた。二人の少女は大きな下駄箱の中から
ただ二つ残っている下駄を取り出して私たちのために敷
台の下に運んでくれた。我ら二人が表に出る時二人の少
女は声を揃えて

「さいなら。」と言った。漱石氏は優しく振り返りながら、

「さよなら。」と言った。私は今朝漱石氏がまだ何も知らずに眠りこけている玉喜久の濃い二つの眉を指先で撫でながら、

「もう四、五年立つと別嬪べっぴんになるのだな。」と言っていた言葉を思い出した。私は京都に来て禅寺のような狩野氏の家に寝泊りしていて、見物するところも寺ばかりであつた漱石氏を一夜こういう処に引っぱって来た事に満足を感じた。昨日狩野氏の門前では何の色艶もないよう

に思われた春雨が、今朝はまた漱石氏と私とを包んで細かく艶あでやかに降り注ぎつつあるように思われた。

その日私たちは万屋で袂たもとを別つて、漱石氏は下鴨の狩野氏の家に帰り、私は奈良の方に向った。

漱石氏の「虞美人草」の腹案はその後狩野氏の家でいよいよ結構が整えられたらしく、その月の上旬に帰京し、私は法隆寺の前の宿に泊って短い「斑鳩物語」の材料を得た。

京都に於ける漱石氏の記憶というものもこれだけに過ぎぬ。もう少し長くなる積りで書いて見たが、書いて見る

とこんな短なものになってしまった。

その後漱石氏はまた一度京都に遊んで、祇園の大友という茶屋で発病してその家に十数日横臥し、介抱のために妻君が西下して来たような事もあったとの事である。然しその頃の漱石氏の話は私は委しくは知らない。ただ横臥した家が祇園の茶屋であったという処から推して考えて見ても、その時の漱石氏はもう寺ばかりを歩いて居たのではなかったろうと想像される。千賀菊は数年前請け出されて人の妾となり、既に二、三人の子持であるという事を寸紅堂の主人が何時か上京の序ついでに話した。

玉喜久は今なお祇園の地に在って、姉さん株の芸子である事を一昨年京都に遊んだ時に聞いた。当年の二少女は一夜の漱石氏の面影を記憶に存しているかどうか。

日本文学電子図書館

回想 子規・漱石

著 者：高浜虚子

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2009年9月4日 第7刷発行

日本文学電子図書館